



国際周期表年 2019 を楽しもう

●
川合真紀 Maki KAWAI

分子科学研究所 所長・日本化学会 会長



元号が平成から令和に変わった節目の年は、科学の世界にとっても、意味のある年となりました。2019年は、メンデレーエフが元素の周期律を発表した1869年から数えて150年目にあたり、それを記念して、国連が国際周期表年と認定しました。2016年は、周期表の第7周期までの118個の元素すべてが命名され、元素の科学の一時代の区切りの年となりました。理化学研究所が113番元素であるニホニウムを発見したことは記憶に新しいところです。第7周期までの表には、未知の元素が1つもなく、すっきりとしています。このように完成したように見える周期表を眺められるのは、いつまででしょうか。そう遠からず、人類は新たな安定同位体を見つけるでしょう。第8周期の元素が1つ見つかる、周期表には新たに未知元素群が書かれることになるでしょう。しばらくの間、第7周期までの完全な周期表を楽しみましょう。会員の皆様も、お手元の周期表を確認して下さい。まさかとは思いますが、113番元素のところが、Ununtriumと書かれた周期表を使ってはいらっしゃらないでしょうか。使っておられる方はぜひ、この機に新しい周期表に更新して下さい。文部科学省の科学技術週間「一家に1枚」からダウンロードできます。

<https://stw.mext.go.jp/series.html>

2005年3月に、「一家に1枚周期表」という印象的なキャッチフレーズで始まった周期表の普及活動ですが、この周期表はすでに11版を重ね、それぞれの元素についての解説は常に新しい社会ニーズが反映されており、拡大して詳細を見るのも楽しい周期表です。

さて、国際周期表年2019 (IYPT2019) の国内での活動は、日本化学会のイニシアチブの下、日本物理学会、応用物理学会などの学協会とともに、産学連携・オールジャパンの体制の下で、周期表を活用した企画を通じて、人類の自然に対する理解、そして、人類社会における元素の役割に対する理解を深めることを目指しています。全体を取りまとめるIYPT2019実行委員会には、上述の「一家に1枚周期表」の監修者の一人である、玉尾皓平博士を委員長にお迎えし、日本化学会の委員会として活動を進めています。中高生、大学生を対象としたエッセイコンテスト、全国10カ所を超える科学館や大学を巡回する周期表特別展、元素にまつわるメッセージを広く産業界および学術会から投稿いただき広告掲載するなど、これまでにない新しい形で活動を進めています。国内の活動については、実行委員会のホームページをご覧ください。

<https://iypt.jp/about/top.html>

玉尾皓平博士と、山内薫東京大学教授のお二人を擁するIYPT2019実行委員会は、お二人の企画力と不屈の実行力にも支えられて、今年の活動を進めてまいりました。本来でしたら、このような大きな企画には、数年の準備期間が設けられるものですが、国際周期表年の認定、国内でどのような組織を作るかなど、すべてが2018年になってから決めるという状況でした。この荒波の中どうにか船出し航海を続けることができているのも、多くの方々の好意的な協力があったのと、感謝しております。本特集号には、IYPT2019の活動に深く携わっている方々を中心として、今年の活動を紹介しております。この活動が、将来に向けての科学の発展の一助となれば幸いです。

© 2019 The Chemical Society of Japan